第6章 外来語「メリット」とその類義語の意味比較 ——新聞を資料として——

宮田 公治

1 はじめに

外来語は、新しい物や概念の導入に伴って使われ始めることが多いが、中には類義の漢語・和語がすでに存在するにもかかわらず多用されるものもある。そうした「既存の類義語を持つ外来語」は、ただ新奇さを求めて使われているだけなら、既存の類義語にさほど問題なく「言い換え」ができるはずである。しかし、外来語と既存語との単純な置換を拒む場合もある。本稿の筆者の関心は、こうした外来語の存在理由を考察することにある¹。

本稿では、「メリット」と類義の漢語「利点」の比較を行う。「メリット」を分析対象に選んだ理由は、使用頻度・使用範囲とも大きく²、かつ「利点」「利益」「長所」など既存の類義語があるためである。資料としては、大量かつ一定の均質性・規範性を備えていることが期待できる、新聞の電子媒体を利用する。

金(2006a: 19)はこの種の抽象的な外来語が基本語彙に進出した原因について、「具体名詞の外来語とは違って、言語内的に明らかにしなければならない」と述べているが、語の用法を言語内的に分析する最も明示的・客観的な手がかりは、語の共起関係であると考えられる。本稿では、「リスク」と「危険」「危険性」を比較した宮田・田中(2006)と同様、格助詞を介して結びつく用言類や、連体修飾成分のタイプの観察を分析の中心に据える。

外来語に限らず、抽象的な名詞の意味分析には共起関係の分析が有効であると考えるが、その手順・方法はいまだ未整備で、場当たりのに行われている印象が否めない。筆者は一貫した分析の枠組みを構築することを目指しており、本稿もその1つの試みである。

2 「メリット」とその類義語

「メリット」と用法に近い語としては、以下のようなものがある。

- (A) 「長所」「美点」「取り柄」「強み」「売り(物)」「セールスポイント」
- (B) 「利益」
- (C) 「利点」「うまみ」

(A)は、[個体](人・商品など)の恒常的特性としての「良い点」を表すが、「メリット」にはそのような用法はなく((1)a. b. は「メリット」には置き換えにくい)、ある[行動]を選択した際に付随する「良い点」しか表さないという点で、明確に異なる(ただし、(A)の語にも(1)c. のように行動について用いることもないわけではない)。

- (1) a. イチローにひけをとらない俊足が【売り】だが、課題は打撃。
- b. 《注：高知のナスは》身が軟らかで、美しい紫紺色と、淡泊でクセのない味わいが【長所】の郷土自慢の夏野菜です。
- c. 定率減税は納税者ごとの税負担の割合をゆがめずに減税を行える【長所】があり、

(B)の「利益」は(2)a. のように行動選択に際して用いられる点でより「メリット」に近いが、(2)b. のように“儲けた金額”(≒利潤)を表す用法が中心である点で異なっている。

- (2) a. 対話の道が北朝鮮にとっても一番【利益】になるんです。
- b. 外資系が日本企業の不良債権の転売で【利益】をあげ、

(C)の「利点」「うまみ」はもっぱら行動選択に際して用いられる点で、「メリット」に最も近いと思われる。

- (3) a. ネットを使った医療情報の提供は、患者さんにも【利点】が多い。
 b. 小田町との合併に【利点】はない。
 c. マフィア側には盗品を早く現金化できる【うまみ】があったとみられる。

このうち「うまみ」はある種の評価的意味を含み、しかも使用頻度もさほど高くないので、今回は「利点」にしばって比較を行う。

3 「メリット」と「利点」の比較

3.1 用例数

朝日新聞・毎日新聞・読売新聞の2003・2004・2005年の朝夕刊データ³から全文検索システム『ひまわり』⁴で「メリット」「利点」を検索し、次の数の用例が得られた。

- ・メリット 7898
- ・利点 5125

以下の分析は、これらを対象として行う。引用する用例もこの範囲のものである。ただし、一部の分析では量的に不十分なので、さらにデータを補った上で比較する場合もある（その場合は該当箇所その旨を述べる）。

3.2 連体修飾成分との共起関係

3.2.1 連体修飾成分の類型と共起成分の意味役割

連体修飾成分は、以下のような分類を行うのが通説であり（奥津1974，寺村1975など）、本稿もこれに従う。

- (4) a. 高まるメリット … 内の関係（≒メリットが高まる）
 b. 効率化できるメリット … 外の関係（内容補充）
 c. 合併するメリット … 外の関係（相対補充）

このうち「内の関係」における共起関係は、後で分析する用言との共起関係に準ずると考えられるので、以下では格関係に還元できない「外の関係」の例にしばって観察する。

「メリット」「利点」の用例における「外の関係」の連体修飾節には、以下の2つのタイプがある。

- (5) a. 自治体にとっては、事業を民間に任せることで、財政負担が低減できる【メリット】がある。（実例）
 b. 自治体にとって事業を民間に任せる【メリット】は、財政負担が低減できることである。（作例）

a. は「内容補充」と呼ばれるタイプで、連体修飾節「財政負担が低減できる」は「メリット」の内容そのものを表し、“～というメリット”に置き換えられる。一方のb. は「相対補充」と呼ばれるもので、「事業を民間に任せる」は、「メリット」を生み出す契機となる行動を表し、“～ことによるメリット”に置き換えられる。

(5)a. b. における「事業を民間に任せる」「財政負担が低減できる」および「自治体」に相当する成分は、さまざまな構文を通じて「メリット」「利点」と共起する。以下の分析ではこれら3つを意味役割として設定し、便宜的に以下のように呼ぶ。

- ・〈受益者〉…「自治体」／「観光客」
 - ・〈行動〉…「事業を民間に任せる」／「バスを利用する」
 - ・〈利益〉…「財政負担が低減できる」／「「直通」である」
- (6) a. 観光客にとってバスを利用する【メリット】は、「直通」であること。（実例）
 b. 観光客は、バスを利用することに【メリット】を感じる。（作例）
 c. バスを利用することには、「直通」であるという【メリット】がある。（作例）

3.2.2 連体修飾成分における〈利益〉〈行動〉との共起

連体修飾成分における内容補充（〈利益〉，(5)a. に相当）と相対補充（〈行動〉，(5)b. に相当）の数を，2003・2004年の朝日・毎日・読売新聞を対象に計測したところ，以下の通りであった（便宜上「～＋{メリット／利点}」という例のみ計測対象とした）。

表1 連体修飾成分（「る」で終わる動詞のみ）と共起する用例数
（朝日・毎日・読売2003年・2004年分）

	内容補充/〈利益〉	相対補充/〈行動〉	計
メリット	623(78.5%)	171(21.5%)	794
利点	724(92.9%)	55(7.1%)	779

どちらも内容補充（〈利益〉）の例の方が多いが，相対補充（〈行動〉）の例が占める割合は，「メリット」の方が高い。つまり，「バスを利用する～」のように〈行動〉が共起する場合は「メリット」の方が用いられやすいと言えそうである。このことの傍証として，「(こと)による」を介した連体修飾の用例数も比較する。「…による」を介すると，連体修飾成分の解釈は〈行動〉（相対補充）に限定される。

(7) 日本でも，起業の敷居が低くなることによる【メリット】は大きいはずです。

表2 「…による」が前接する用例数（朝日・毎日・読売2003～2005年）

メリット	82(1.04%)
利点	14(0.27%)

(%は全用例数に占める割合)

やはり「メリット」の方が多。つまり，“結果として発生するもの”として表現する文脈では「メリット」が使われやすい，という傾向があると言える。

3.3 連体・連用修飾成分における〈受益者〉との共起

次に，〈受益者〉との共起関係について分析する。「○○の{メリット／利点}」という場合，「○○」は〈受益者〉〈行動〉〈利益〉のいずれの可能性もある。

- (8) a. 成田空港間の開通によって，利用者の【メリット】が広がる。⇒〈受益者〉
- b. 合併の【メリット】，デメリットが伝わっていない。⇒〈行動〉
- c. 官が落札しても，競争による効率化の【メリット】があるとされている。⇒〈利益〉

また，「○○に{メリット／利点}が{ある／ない}」などの存在構文において，二格名詞は〈受益者〉か〈行動〉である。

- (9) a. 行動計画は，多国間の貿易交渉が先進国だけでなく途上国に【メリット】がある点などを強調し，
⇒〈受益者〉
- b. 駐輪場利用に【メリット】があれば，放置自転車も減るはず ⇒〈行動〉

こうした構文において，〈受益者〉の解釈になる場合は，「利点」にやや置き換えにくいという印象がある。そこで，〈受益者〉が「の」「に」を介して結びついた例を比較する。ここでは便宜のため，〈受益者〉である確率が極めて高いと思われる，接辞「者」「側」がついた名詞が直前についた例のみ計測した。なお，3大紙3年分では比較するに十分な数が得られなかったため，1991年から2002年までの毎日新聞・日本経済新聞のデータも採集対象に加えた（これらも加えた総用例数は，「メリット」34986，「利点」19492）。

「○○者の」「○○者に」「○○側の」は，やはり「メリット」と共起する例が多い。（ただし「○○側の」はほとんど差がない）。

表3 「〈受益者〉{の／に}」が前接する用例数
(朝日・毎日・読売2003～2005年, 毎日・日経1991～2002年)

	〇〇者の～	〇〇者に～	〇〇側の～	〇〇側に～
メリット	168(0.48%)	101(0.29%)	148(0.42%)	27(0.08%)
利点	36(0.18%)	28(0.14%)	40(0.20%)	14(0.07%)

(%は全用例数に占める割合)

次に、〈受益者〉に解釈が限定される、「…への」「…にとっての」「…にとって」が「メリット」に直接結びついた例を比較する（これは3大紙3年分のデータのみ）。

- (10) a. 市長はこれまで、貸し付け条件として「**地元への【メリット】**」を強調。
 b. 《注・クーポンを発行することの》**メーカーにとっての【利点】**は、特定の消費者に対し、自社商品を直接アピールできることだ。
 c. 月齢20カ月以下を検査対象から外すと米国産牛肉の約8割が対象外となり、米国にとって【メリット】は大きい。

表4 「〈受益者〉{への／にとつての／にとつて}」が前接する用例数
(朝日・毎日・読売2003～2005年)

	への～	にとつての～	にとつて～
メリット	52(0.66%)	26(0.33%)	61(0.77%)
利点	4(0.08%)	8(0.16%)	11(0.21%)

(%は全用例数に占める割合)

やはり、いずれも「メリット」の方が用例数が多い。以上の観察から、あくまでも傾向にとどまるものではあるが、特定の〈受益者〉を想定する場合は「メリット」の方が使われやすい、ということが示された。

3.4 用言類との共起関係

3.4.1 比較の方法

続いて、助詞を介して共起する用言類（動詞・形容動詞など）について、「リスク」を分析した前稿（宮田・田中2006）と同様、以下の手順で比較を行う。

- ① 助詞「が」「を」「に」「は」「も」を介して後接する用言類の数を計測する（便宜上、名詞+助詞に用言類が直接結びついている例のみ数えた）。「は」「も」の例は、相当する格助詞の例に組み入れて数えた。受身・使役の例は、能動態に直して数えた。
- ② 少なくとも一方の名詞と共起した例が4以上出現した用言類のみを分析対象とする（どちらも3例以下のものは除外した）。
- ③ 「メリット」と共起した用言類の数を「利点」と比較し、次のA～Eの5類に分ける。
 - A：「利点」とのみ共起
 - B：「利点」と共起する例が多い（出現率が「メリット」の3倍以上）
 - C：A・B以外
 - D：「メリット」と共起する例が多い（出現率が「利点」の3倍以上）
 - E：「メリット」とのみ共起
- ④ 共起した用言類を、以下の意味カテゴリに分類する。
 - (1) 人が被る影響
 - (2) 認識・伝達
 - (3) 行動

- (4) 程度の変化
- (5) 発生・消失
- (6) 存在
- (7) その他

(1)～(4)は、前稿のものを踏襲している。(5)(6)は前稿では「その他」に含めていたものだが、「メリット」の分析では偏りが見られたので、本稿では独立して取り出した。

以上の結果を表5に示す。

3.4.2 意味カテゴリーの比較

(2)～(4)からは、顕著な偏りは見出しがなかった。それ以外については、以下のような違いが見られた。

- I 「(1)人が被る影響」はC・D・Eに偏っている。
- II 「(5)発生・消失」はC・D・Eに偏っている。
- III 「(6)存在」のうち、「少ない」「ない」などの類はC・D・Eに偏っている（「多い」「ある」などの類は偏りはない）。

すなわち、上の3つのタイプの用言類は、いずれも「メリット」と共起しやすく、「利点」とは結びつきにくいという結果が得られた。

なお、「(2)認識・伝達」でAに位置づけられている、つまり「利点」とのみ共起するとされた「認識する」「踏まえる」「分析する」「見直す」「解説する」は、いずれも用例数が4～5と十分でないので、1991年から2002年までの毎日新聞・日本経済新聞のデータで検索してみたところ、すべて「メリット」と共起する例が見つかった。すなわち、“「メリット」は使えず、「利点」としか共起できない”という用言類は見当たらず、「メリット」の方がより広い用法をカバーしていると言える。

3.5 「メリット」の“結果性”・“個別性”

上記の共起用言類の偏りと、3.2および3.3の観察で明らかになった次の2点との関係を考察する。

- (A)「メリット」は、相対補充の連体修飾成分と共に“結果として生じる”という意味で用いられやすい。
- (B)「メリット」は、特定の〈受益者〉が明示される場合に、使われやすい。

(A)は、II「(5)発生・消失」（「～が出る」「～を生み出す」「～がなくなる」など）と結びつきやすいという点と符合する。すなわち、もともと〈行動〉に内在している特徴としてではなく、特定の〈受益者〉がその〈行動〉を選択した際に結果として発生するものとして捉えられる時、「メリット」が使われやすいと言える。下の例に即して言えば、「定額制」や「運賃値下げ」に恒常的・普遍的な「良いところ」があるという意ではなく、ある〈受益者〉がある状況下でそれを選択した場合に〈利益〉が発生する、ということ述べている。

- (11) a. それほどデータ通信をしない人でも定額制の【メリット】が出るようにした。
- b. 《注：運賃の値下げによって》大幅に乗客が増加し、仙台都市圏全体に【メリット】が生じた。

このことを“結果性”・“個別性”という意味特徴で表すことにしたい。

それに対して「利点」は、「点」が「特定の場所。箇所。」（『新明解国語辞典 第六版』）を表すことからしても、もともと〈行動〉の一部をなす構成要素である、つまり〈行動〉に恒常的・普遍的に内在する特徴を指すという意味合いが強いと考えられる。「(6)存在（有・多）」の「～を持つ」と結びつく例が多いのは、このことを裏づけている。

- (12) これを機に、犯人への強い先入観を与えないなどの【利点】を持つ似顔絵が捜査の主流となった。

なお、同じ「(6)存在（有・多）」の中で、「多い」は「利点」と結びつきやすい（表5ではCに位置づけられているが、出現率は「メリット」の2.99倍）一方で、「高い」はE、つまり「メリット」とのみ共起す

るという結果が出ている。また「大きい」はCだが、「メリット」の出現率は「利点」の2.36倍である。「多い」は数、「高い」「大きい」は程度と、把握のしかたが異なっている。これは、前述した「利点」の「点」が数としての把握に効いていると考えられるが、恒常的・普遍的であるがゆえに複数のものを並べて列挙できるということもあるだろう（「挙げる」の出現率も、「利点」は「メリット」の2.06倍）。これに対して「メリット」は、個別的な状況に即して発生するという場合にも用いられるので、単一視点でその程度を量るという捉え方が多くなるのだと思われる。

(B)は、I「(1)人が被る影響」「～を得る」「～を受ける」「～を享受する」などと結びつきやすい点と対応する。これらの動詞は、特定の〈受益者〉を動作主（もしくは経験者）とする構文で用いられる。これもやはり“個別性”という意味特徴から導かれるものだろう。(13)において、「中国への輸出」はどんな場合も利益をもたらすというわけではない。

(13) 日本は中国への輸出で【メリット】を受けている。

III「(6)存在（無・少）」「～がない」「～が少ない」「～が乏しい」などが「メリット」と共起しやすいのも、その存在が恒常的・普遍的でないことの反映であろう。また、連体修飾成分を持つ用例に限って考えてみると、これらの用言類と共起する例は、表6のように〈行動〉の連体修飾成分（相対補充）に集中している。相対補充の連体修飾成分が「メリット」と結びつきやすいことは、既に見た通りである。

(14) a. 静岡側には、こちらと合併する【メリット】がない。（〈行動〉の連体修飾）

b. 社会復帰を果たしたい被告にとっても、この方式を採る【メリット】はあるだろう（〈行動〉の連体修飾）

(15) a. ヤフーは内容が充実したホームページにヒットする【メリット】があります。（〈利益〉の連体修飾成分）

b. ?ヤフーは内容が充実したホームページにヒットする【メリット】がない。

（〈利益〉の連体修飾成分，作例）⇒このような例は見当たらなかった

表6 連体修飾成分を伴う例における「ある」「ない」の共起数
（朝日・毎日・読売2003・2004年）

	メリット	利点
相対補充の連体修飾	171 (100%)	55 (100%)
～[がはも]ある	5 (2.9%)	4 (7.2%)
～[がはも]ない	33 (19.3%)	5 (9.1%)
内容補充の連体修飾	623 (100%)	724 (100%)
～[がはも]ある	502 (80.1%)	605 (83.6%)
～[がはも]ない	0 (0.0%)	0 (0.0%)

以上をまとめると、「メリット」は、“結果性”（ある行動を選択した結果として生じるもの），“個別性”（特定の状況下で有無を判断されるもの）という意味特徴を強く有するという点に、「利点」との違いが見出せる。

ただし、この違いは程度の差にとどまるものである。次のような例も多くはないが存在するので、「利点」は“結果性”“個別性”を有さない、と主張しているわけではない。

(16) 《注：政策投資銀行に融資を求めることで》商法上の手続きを簡略化できたりするなどの【利点】が生じる。

一方、「メリット」も“恒常性”“普遍性”を有する文脈でも違和感なく使ってしまう。

(17) SEDは省電力、動画表示に優れている。それぞれ、【メリット】を持っており、勝敗の行方はまだ見えない。

表7 「メリット」「利点」の意味特徴の比較

	結果性・個別性	恒常性・普遍性
メリット	○	○
利点	△	○

このような傾向の違いは、コーパスを用いた帰納的分析によって始めて、明確に確認できるものであろう。

4 おわりに

「リスク」と「危険」「危険性」を比較した宮田・田中(2006)では、“「危険」「危険性」しか使えない”用法があり、外来語と既存語が一部で重なりつつ、それぞれ固有の用法を持っていた。それに対して、本稿の分析では、“～は「メリット」と結びつきやすい”という形で偏りが見られる場合ばかりであり、“～は「利点」とのみ結びつく”というタイプの偏りは観察されなかった(表5でAに位置づけられている5語も、3.4.2で述べたように、追加調査では「メリット」との共起例が見つかった)。「利点」は「点」に縛られるためか、「メリット」よりも使える範囲が狭い。既存語「利点」があるにもかかわらず「メリット」が広く普及した要因として、この「用法の広さ」が挙げられるだろう。

外来語は「有契性 motivation」(ウルマン 1969)を欠く、つまり意味が不透明なものであり、これがカタカナ語の「分かりにくさ」の元凶であるのだが、その反面、既存の語が持つ「しがらみ」がないので、比較的自由にさまざまな語と共起できるという特徴がある。外来語は、新奇さなどの「イメージ」が語られがちだが、こうした「自由さ」も、外来語が便利に使われる一因であると考えられる。

本稿で試みた、大量の用例にもとづく共起関係による意味分析法は、「語感」が希薄な外来語の研究で効果を発揮すると思われるが、他の抽象名詞全般に対しても有効なものであるので、今後も外来語に限らず事例研究を重ね、分析方法の整備を進めていきたい。

注

- 1 同様の関心にもとづく研究として、金(2006a, b)がある。
- 2 「国会会議録検索システム」で「メリット」を検索したところ、1950年頃から現代と同様の用法が見られたが、1960年代後半になって用例数が急増しており、この頃に広く用いられる外来語になったと思われる。なお、このデータを用いた外来語の通時的研究として、茂木(近刊)などがある。
- 3 日外アソシエーツ「CD-朝日新聞・毎日新聞・読売新聞」各2003・2004・2005年版を使用した。
- 4 国立国語研究所が作成・公開しているソフトウェア。詳しくは以下のページを参照。<http://www.kokken.go.jp/lrc/>

参考文献

- ウルマン, ステファン(1969)『言語と意味』大修館書店(池上嘉彦訳)
奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論一名詞句の構造一』大修館書店
金愛蘭(2006a)「外来語「トラブル」の基本語化」『日本語の研究』2-2, 18-32, 日本語学会
金愛蘭(2006b)「新聞の基本外来語「ケース」の意味・用法」『計量国語学』25-5, 215-236, 計量国語学会
寺村秀夫(1975)「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」『日本語・日本語文化』4, 大阪外国語大学
宮田公治・田中牧郎(2006)「外来語「リスク」とその類義語の意味比較—既存の類義語を持つ外来語の存在理由」
『言語処理学会第12回年次大会発表論文集』言語処理学会
茂木俊伸(近刊)「国会会議録における行政分野の外来語」松田謙次郎編『国会会議録を使った日本語研究(仮題)』
ひつじ書房

表5 「利点」[メリット]と共起した用言類(朝日・毎日・読売新聞2003~2005年分)

※数値は「利点」と共起した用例数/「メリット」と共起した用例数

意味カテゴリ	構文	A「利点」のみ	B「利点」多	C画方	D「メリット」多	E「メリット」のみ
(1)人が被る影響	<人>が〇〇を			失う(4/14)	得る(4/24), 享受する(3/35), 受ける(1/23)	
	〇〇が<人>に					及ぶ(0/4)
知覚	<人>が〇〇を	認識する(5/0), 踏まえる(5/0)	見つける(5/1)	認める(5/3), 理解する(7/8), 実感する(5/23)	感じる(12/76), 臭い出す(2/13)	
	<人>が〇〇に		気づく(4/1)			
思考	〇〇が			を知る(4/5), 分かる(9/29), 見える(10/40)		見当たらない(0/4)
	<人>が〇〇を	分析する(5/0), 見直す(4/0)		思込む(16/20), 考える(17/55), 考慮する(3/5), 探る(2/5)		検証する(0/5), 確認する(0/4)
(2)認識・伝達	<人>が〇〇に		評価する(5/1), 着目する(5/2), 注目する(5/2)		期待する(7/58)	
	<人>が〇〇を				重視する(1/7)	
伝達	<人>が〇〇を	解説する(4/0)		主張する(5/3), 指摘する(26/16), アピールする(24/15), 挙げる(83/62), 訴える(26/22), 語る(28/24), 紹介する(13/12), 説明する(54/51), 赤り込む(4/4), 話す(22/22), 強調する(187/234), 示す(11/25), 伝える(3/7), を聞く(1/4), を提示する(1/4)		言う(0/4)
	<人>が〇〇を		取り入れる(5/1)	生かす(353/249), 活用する(13/11), 追求する(3/12), 放棄する(1/4)	放棄する(1/5), 求める(2/16)	
(3)行動	〇〇が			が増える(4/5), 薄れる(9/30)		
(4)程度の変化	〇〇に			なる(18/77)		
(5)発生・消失	〇〇を			発揮する(4/16)	与える(3/14), 出す(1/9), もたらす(4/32)	生み出す(0/13), 引き出す(0/7)
	〇〇が			生じる(4/9), 生まれる(9/26)	出る(5/35), なくなる(2/23)	現れる(0/4)
(6)存在	〇〇を		持つ(13/3)			
	〇〇が			多い(98/51), ある(1826/2025), 計り知れない(4/17), 大きい(129/469)	放棄する(1/5), 求める(2/16)	高い(0/7)
(7)その他(関係など)	〇〇が			少ない(35/157)	ない(58/456), 小さい(2/31)	乏しい(0/14), 薄い(0/9)
	〇〇に		挙げる(6/2), 加える(10/5)		つながら(1/10)	挙げる(0/5), よる(0/4)
	〇〇を					上回る(0/6), 優先する(0/4)
	〇〇が		生きる(6/2)	明確だ(6/5), 必要だ(3/9)		